

JR東日本、東北新幹線の車内誌である「トランヴェール」に関して、今号でも取り上げたい。それは、現在、巻頭エッセイを書いているのが、沢木耕太郎さんだからである。12月号で「巻頭エッセイ【旅のつばくろ】④」とあるので、ずいぶんと長い期間にわたって連載が続いていることになる。伊集院静さんとも違うし、角田光代さんとも違う沢木さん独特の文章である。

海に行きスマホをなくしたと思ったら、それが海から出てきたお騒がせな大学生の長男が、以前私に聞いてきたことがある。「『深夜特急』って読んだことある？」「おもしろいよ」私は読んだことがなかった。筆者が沢木耕太郎であることは知っていた。息子に聞いてみると、中学時代の国語の先生であるW先生が、若い頃に読んでおもしろかったという話をしてくれたそうである。それを覚えていて、大学生になり読んでみたということらしい。教師と生徒のいい関係である。うらやましい。果たして、W先生と同じ国語教師である私は、生徒に何か残せてきたのだろうか。

息子は、このW先生の国語の授業が好きだった。それは話を聞いていればわかる。あるときは、こんなことがあったそうである。作品名は忘れたが、ある文学教材の授業だった。うちの息子は、国語の授業が終わり、休み時間になってもしばらく授業のことを考えていたそうである。すると、気がついたときには、教室には誰もいなかったそうである。次は保健体育の授業で、みんな教室から出て行った後だった。息子が変わっているとも言えるが、とりあえずノーマルな範疇に入っていると親は思っている。大事なことは、それだけ国語の授業がおもしろかったのである。いや、表現を変えると、国語のW先生がその作品の魅力を引き出してくれたのである。息子は、その作品の魅力に浸っていたのだと思う。幸せな男である。この話を息子は私に楽しそうに話してくれた。

おかげで息子は中学校時代は恵まれた国語の時間を過ごすことができた。このW先生は、息子にとって部活動の顧問の先生でもあった。部活でも県大会に出場させていただいた。W先生は、タイプでいうと、教育界の松岡修造みたいな方である。熱い人である。

W先生の影響を受けているはずの息子だが、学校の先生になりたいとか、国語の先生になりたいとか言ったことがない。実際、教師にはなる気がなかった。父親が国語の教師であるにもかかわらずである。大学は理系に進んでいる。思うに、息子は国語が好きだったかどうかはわからないが、W先生の国語の授業が好きだったのである。息子が高校に入るときに、彼に言ったことがある。「高校の国語の授業は、W先生のような授業ばかりではないから、決して期待しないように」案の定、私の予想は当たった。息子は高校の国語の授業にかなり幻滅したらしい。父親と違い滅多なことで人のことをわるく言ったりしない息子だが、高校の国語の先生のことには言った。授業の内容よりも、教師としての姿勢が許せなかったらしい。それを聞いても私は驚かなかった。これが現実なのである。誤解のないように断っておくが、息子の高校にはすばらしい先生もいた。息子は、その先生方のことも「〇〇先生はすごい」と楽しそうに話してくれている。もちろん国語の先生にもすばらしい先生はいた。だが、息子の担当にはならなかったということである。

このような経緯から息子の恩師であるW先生のことには知っていた。県教育センターに勤務していた私が転勤することになった。後任者とは引き継ぎを行う。私が引き継ぎをした相手がW先生である。これを縁と言わずして何と言うのだろうか。県教育センターにやってくる若い先生方を松岡修造が指導するのである。適任というしかあるまい。

相変わらず汚いままの息子の部屋には、『深夜特急』が残されている。年末年始にでも、そろそろ読んでみようかと思う。そして、息子と『深夜特急』とW先生の話に花を咲かせるのもわるくない。